

## ■フォニックスってなあに？

Phonicsの歴史は18世紀からスタートします。もともとラテン語で聖書を読んでいたのですが、やがて英語に変わりました。しかし、ラテン語やゲルマン語がいきりまじってできた英語は書いてある通りすんなり読める訳ではありません。そこで、それまで物語を読み聞かせて単語全体をひとつのかたまりとして覚えさせていた読み書きの方法（これをWhole Languageとよびます）を、よりシステマティックに子どもにもわかるようなシンプルさで音声と文字の関連をおしえるためにできたのがPhonicsです。

長年の紆余曲折のすえ、現在、アメリカのほとんどの小学校ではPhonicsを教えるのが当たり前となっていますが、Phonicsだけでは不十分な部分もあるという意見もとりにいれて、従来のWhole Languageを併用しながら教えるところが多いようです。

実際、じょうずにPhonicsを教えれば、子どもたちは早いうちから一度も学んだことのない単語を読めるので、英字新聞の70%は推量で読めると言われています。

[参考サイト]

アメリカの教育情報が満載されたサイト。 <http://www.eric.ed.gov/>

## ■フォニックスを学んだらどんな良い事が？

読んだ事のない単語のアルファベットの並び方や、規則をみて、全体の発音の推量ができるようになります。

アメリカでは園児でも英字新聞の70%ほどが読めるようになる子どもがいるそうです。

## ■フォニックス学習は何歳頃がベストですか？

アメリカでは幼稚園からスタートし、小学校3年生で終わります。しかし、日本ではアメリカ人の子どもほど毎日英語を使う訳ではないので、事情が異なつて来ます。もちろん、日本も園児からスタートするのがベストなのですが、それが出来なかった人は何歳になっても学習することは良い事です。

■学習にはどのくらい時間がかかりますか？

人によって違いますが、週に1度、10分程度の学習なら2年。PML開発の「J—フォニックス」学習レッスン用紙は700枚ほどありますので、これを消化するのに2年半だと考えています。

■フォニックスは世界中で使われているのですか？

世界中の多くの小学校で学習されているようです。

アメリカ政府の例：

<http://nces.ed.gov/programs/coe/2003/analysis/sa03c.asp>  
はアメリカの教育分析センターのサイトです。この中に、2003年の統計として、フォニックスに関する記事特集があります。

タイトル：「公立幼稚園で読書活動にどれほどの時間をかけているか」

「ほとんどの公立幼稚園で読み方を勉強している。（1998-99年。ワールストンとウェスト報告。2004年）。フォニックス学習のように「読める力」を増幅させる活動は、ワークシートを読んだり、単に本を読む以上に毎日時間をかけて実行。

フルタイムの幼稚園では、毎日のレッスンにフォニックスがあり、新しい単語や園児が選んだ本をあたえて、大きな声で読む、声を出さずに読む、ワークシートをする、時にはベースとなる本を読んでいる。

Special Analysis-Reading— Young Children’s Achievement and Classroom Experiences

Percentage of public school kindergarten classes that used certain reading activities daily, by program type: Spring 1999

Percentage of public school kindergarten classes that used certain reading activities daily, by program type: Spring 1999  
Special Analysis 2003 Image  
SOURCE: Walston, J., and West, J. (2004). Full-Day and Half-Day Kindergarten in the United States (NCES 2004-078). Data from U.S. Department of Education, NCES, Early Childhood Longitudinal Study, Kindergarten Class of 1998-99 (ECLS-K), Base Year Public-Use Data File

(NCES 2001-029).

この読書活動で一番ひんぱんに行われている事は、

- 1) アルファベットの文字と音を表現する文字とのマッチング。
- 2) 音と文字との関連性。

フルタイム学習で行われる学習は以下の通り：

- 1) 文字認識。
- 2) 文字と音のマッチング
- 3) アルファベット文字の書き方
- 4) 語彙学習
- 5) 文脈から、読みを推量する
- 6) 単語の韻
- 7) 大きな声で読む
- 8) マルチシラブルの単語を読む
- 9) アルファベットの順番に単語を並べる

<http://nces.ed.gov/pubsearch/pubsinfo.asp?pubid=2006056>  
には、小学校1年生の学習統計があります。

それによると：

1年生が一番国語で力をいれるのは、

- 1) フォニックス学習
- 2) 大文字、小文字の違い
- 3) 正確な句読点 (Punctuation)

#### ■フォニックスだけで英語学習は大丈夫ですか？

ハーバード大学のCatherine Snow (キャサリン・スノウ) 教授がいうように「これが唯一の学習法というものはない」と思います。

ただ、どれが子どもにあった学習法かという一定の順位を付ける事が出来るでしょう。この観点から言いますと、フォニックスが一番科学的であり、システムティックにできていると言えるでしょう。

Whole Languageという学習法は、「子どものフィーリング」を重視し、フォニックスはどちらかというところ「子どもの心」を大切に考えていると言われてい

ます。

#### ■フォニックス学習の欠点は？

- ・教師がドリルレッスンに頼るきらいがある。
- ・音声学的な学習を強いると、子どもたちが学習意欲をなくすおそれがある。

#### ■Whole Language学習の欠点は？

- ・読本の中にいちどもでなかった単語は読めないという現象がある。
- ・一般的に教師はアルファベットの「読み」を重要視しないため、肝心な単語の読み方を無視してしまう場合がある。

#### ■フォニックスはサラリーマンにも役立ちますか？

日本で英語をしっかりと学んでいても、ネイティブなみの英語の発音になるにはそれなりの努力が必要です。

例えばよく言われる、LとRの違いを聞き分けられ、自分で言えるかどうか。いくつか発音上の注意点を述べます。

以下の単語は左右もしカタカナで書けば、同じ表記となります。

#### LとRの区別：

Lice (しらみ) 対 rice (ごはん) : ライス  
play (遊ぶ) 対 pray (祈る) : プレイ  
light (明かり) 対 right (右) : ライト  
load (負担) 対 road (道路) : ロード  
love (愛) 対 rub (摩擦) : ラブ

#### SとTHの区別：

sink (沈む) 対 think (考える) : シンク  
sunk (沈んだ) 対 thank (ありがとう) : サンク  
sick (病気) 対 thick (分厚い部分) : シック

#### FとHの区別

food (食べ物) 対 hood (ずきん) : フード

SHとSの区別:

she (彼女) 対 sea (海) : シー

shit (糞) 対 sit (座る) : シット

BとVの区別:

berry (いちごなどのベリー) 対 very (大変) : ベリー

以上のような、カタカナにするとまったくどちらか分からない物があります。もし、フォニックスをしっかりと学んだ園児・児童なら、問題なく音を使い分けて発音する事でしょう。

英語を明確に発音出来る事は、とくにビジネスの世界では重要でしょう。ときどき、「発音等無視しても良い。内容が一番」という人たちがいます。「内容が重要」というのは当たり前の事です。しかし、発音はどうでも良いというのは、出来ない人の「悪あがき」です。そんなことをいわずに「自分たちは正確な発音が出来なくてもしっかりとビジネスができていますよ」とでも言えば、分からない事はありません。

とにかく、海外で活躍するビジネスマンたちはじっくり時間をかけて、ほとんど英語で交渉しているわけですが、何度も「えー。今言った事をもう一度」と繰り返して聞かれるより、しっかりした発音で一発で分かってもらえる方がずっと交渉は短時間でかつ「あいつとはビジネスがしやすい」と評価されるでしょう。

余談になりますが、Steven Spielberg監督が、Jeffrey Katzenberg, そしてDavid Geffen たちと「DreamWorks SKG」を立ち上げた時のことです。この会社の将来性を信じて多くの投資家が彼らにアプローチしました。しかし、彼らはどんなにお金を積まれても断り続けたのですが、その断った理由は、「私たちはお互いに理解しあえる言葉を話せる人たちと一緒に仕事をしたい」という記事が新聞に掲載されていました。この「言葉」とは文字どおりの「英語」かもしれませんが、別の意味かもしれません。しかし、よくアメリカのマスコミで「日本のだれだれの首相はきれいな英語で大統領と語り合った」と報道されるところから、やはり英語を世界共通語として位置づけているのは明らかでしょう。

